

平成23年年頭所感 歴史ミステリー その3 くさかり小児科 草刈章
「本邦最初の本格的な小児科医学テキストが米沢で執筆された？」

新年明けましておめでとうございます。今年こそ政治や経済状況に明るさが見えるようにと、切に願いたいところです。

この度も新年に相応しい話題かどうか分かりませんが、皆様にとっても信じていただけないような表題の米沢に関する歴史ミステリーを紹介したいと思います。

私は7年程前からメタボ対策として「ゆるジョグ」を始めました。これは週3回水、土、日に主に早朝5時半ほどから10～18km程、ゆっくりと季節の移ろいを楽しみながらジョギングするものです。学会や医師会旅行での旅先でもできるだけ行っていますが、そのときは時間の許す限りその地の名所旧跡、由緒ある神社仏閣を巡りながらのジョギングです。表題の件は故郷の米沢でジョギングをしていたときに、たまたま目にしたとある寺院の看板(写真1)で知ったものです。

その寺は米沢市の中心地から南西の校外、奥座敷ともいえるべき小野川温泉のほど近くにある館山寺で(写真2)、その門前に「堀内素堂の墓 二十歳に江戸に登り蘭学と儒学を学んだ。文政五年に帰国し、僅か二十二歳で十三代藩主家定の側医に抜擢された。四十五歳のとき蘭語の医学書を翻訳、幼幼精義と題した。日本で最初の小児科医学書として有名である。門人は百人を超えた。義侠心に富み、高野長英を暫く匿った。嘉永七年三月十八日没。五十四歳。米沢市米沢観光協会」とありました。これは米沢に生まれ育ち、歴史好きの小児科医としては不覚ながら初見聞の内容でした。草深い陸奥の高々十五万石の港もない内陸の城下町米沢で、この地で生まれた医師が蘭学の医書を翻訳し本邦最初の小児科テキストとして世に出したというものです。なぜそのようなことが可能だったのでしょうか。大変な驚きであり、また故郷にこのような偉大な先人がいたことに誇らしく、また嬉しく感じたものです。

それでは堀内素堂とはどのような人物だったのでしょうか。ネットと文献(松野良寅;米沢洋楽の系譜—東北の長崎:1988.米沢)で調べてみますと、享和(きょうわ)元年(1801)、米沢藩の代々の藩主の侍医となった医家の家系の次男として生まれました。幼名は忠公(ただきみ)、長じて忠寛(ただひろ)と名乗り、素堂は号です。父忠明が忠寛11歳のときに死去し、そのため家業を継ぐべく当

時の藩主上杉治広（はるひろ）の侍医であった高橋桂山宅に寄宿して医業の見習いを始めました。上杉鷹山の幼少期の師となった藁科松柏もやはり父を早く亡くし、若い時期から医家の家業を継がざるを得ませんでした。かくいう筆者も父を2歳のときに亡くしたのでこれは身につまされるものがあります。

忠寛は二十歳のとき桂山の推挙によって江戸遊学の機会を得て、西洋眼科学の第一人者杉田立卿（杉田玄白の末子）について医学、地理学・物理学の泰斗青地林宗（坪井信道、高野長英らの岳父）について蘭学、そして古賀穀堂について儒学を学びました。いずれも当代一流の先進的開明的な学者で、忠寛はこれらの師のもとで時代の最先端の学問を修得しました。

忠寛は単に学問にいそしむだけでなく、温厚篤実な人柄と旺盛な向学心をもっていたため、江戸の著名な学者・知識人と幅広い交遊関係を持ちました。当時の三大西洋医家といわれた坪井信道・伊東玄朴・戸塚静海、幕府医学館最初の蘭方外科医桂川甫周、他に筆者が多少なりとも知っている人を挙げれば高野長英、緒方洪庵、箕作阮甫、佐久間象山、安井息軒など、幕末の歴史に登場する多彩な人物がいます。

江戸遊学3年の後、藩命によって第十一代藩主斉定の御側医になるべく国元に呼び返されました。米沢では藩主の侍医としての役目を果たしながらも、藩の医学校、好生館の運営にも関わりそれまでの漢方医学の授業を蘭方に変えるなど大きな改革を果たしました。また堀内塾を主宰し多くの向学心に燃える若者を教育し、その門人は優に **100** 人を超えたとあります。さらにこの門人から緒方洪庵の適塾などさらに有名な塾へ進学するものも輩出しました。

表題の小児科テキストですが、これは堀内忠寛が天保十四年(1843)、欧州随一の名医と評されるドイツ人の医学者、フーフェラント（C. W. Hufeland, 1762 ～ 1836）の著作した医学書の小児科に関する部分を翻訳し、「幼幼精義」として出版したものです。初篇3巻は小児疾患の総論、第2篇4巻は疾病の症候や治療法、特に天然痘に詳しく、牛痘接種の利害、痘苗の良否に言及しています。原本は千葉大学附属図書館の古医書コレクションのサイト

(http://kintou.11.chibau.ac.jp/~koisho/80504/lime_page/80504_002.html)で閲覧できます。(写真3) しかしすべて漢文で記述されており、誠に残念ですが筆者は内容を理解できませんでした。

それではこのフーフェラントという医師はどのような人物、そしてその著作はどんな内容だったのでしょうか。これについては [View/Open - 第2回名古屋](#)

大学博物館企画展記録 フーフェラントと幕末、

http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/7294/1/num19_149.pdf

に詳しく解説されています。その概要を紹介しますと、フーフェラントはドイツ（当時ワイマール公国）のチューリングゲン出身で、1783年ゲッティンゲン大学を卒業し、父を助けて町医師として10年間活動後、イエナ大学教授やプロイセン宮廷医兼慈善病院（シャリテ）長、ベルリン大学医学部長を務めました。

右目失明やナポレオン軍侵攻にともなう苦難を経験しましたが、晩年は平安で、ヨーロッパ随一の名医として尊敬され、カントをはじめとした啓蒙思想家と親交があり、それが彼の多数の著作に反映されています。自然治癒力を重視した医療を行うとともに、天然痘予防の種痘を熱心に推進しました。彼の「長生法」（長生きの秘訣集）は現代でも読まれています。

彼が特に重視したのは問診を重ねているうちに患者との交感（ラポール）、心と心の通じ合いを得ることでした。50年にわたる医療経験をまとめた

“Enchiridion medicum” 「医学必携」にはその精神、ヒューマニズム（人間の尊厳、平等、自由の尊重）に根ざした「西洋医学のこころ」が説かれ、堀内素堂らの幕末の蘭方医たちはその精神に感銘を受け、こぞって翻訳に取り組み熱心にその学問と精神を学ぼうと努力しました。

その「医戒」は時代を超えて医師として肝に銘じなければならないものと思われる。

- ・ 病気の人を見てなんとかしてこれを救いたいものだと思う気持ちこそが、医術の出発点でなければならない。（冒頭の有名な一文）
- ・ 貧しい患者が流す感謝の涙は、富んだ患者が謝礼に差し出す一握りの黄金と比べものにならないほど尊いものである。
- ・ 安価な薬で十分な場合には高価な薬を使わず、つとめて病人の経済的負担を軽くしなければならない。
- ・ 病人を（弓術の）「的」と考えるべきであって、（的を射る手段である）「弓矢」とみなしてはならない。実験を試みるような治療をしてはならない。
- ・ 患者には最後まで生の望みを持たせ続けるべきである。患者に不治の病であることを告げることは「死を与えること」になるから、命を永らえさせるのが仕事である医師たる者が絶対にすべきでない。

フーフェラントは「自然治癒力を重んじたヒポクラテス主義者」と位置づけられ、また当時最先端の医学、種痘を熱心に推進しました。堀内素堂はそれに

強く共鳴し、本邦にその最新の医学医療を普及すべく渾身を傾注して「幼幼精義」を出版したのでしょう。私事で恐縮ですが、最近筆者は中山書店の小児科テキスト、小児科臨床ピクシス20「かぜ症候群と合併症」を編集する機会を得ました。本書の編集方針は進化医学の考え方を基本として、ヒトの本来持っている自然治癒力を生かし、抗菌薬や抗ヒスタミン剤などの薬剤に頼らない医療のあり方、そして肺炎球菌ワクチンやインフルエンザ菌b型ワクチン接種による予防医学を推進する内容としました。150年前に同じ考え方と情熱で小児科のテキストを出版した郷土の先輩がいたかと思うと、深い感慨を覚えます。

ここで筆者が強調したいことはこのような堀内素堂の偉業は幸運な偶然によってなされたものではありません。米沢にはそれを成さしめる土壌があったのです。滅亡の淵にあった米沢藩を甦らせた第10代藩主上杉鷹山公は、人材育成のための藩校興譲館の創立の他に、医学校「好生堂」を設立して積極的な蘭学の導入を行いました。そして地元で教育するだけでなく若き俊英達を杉田玄白や大槻玄沢、桂川甫周、さらにはシーボルトや緒方洪庵、新しくはポンペなどの一流の医師の下に遊学せしめ、さらには中央で活躍している医師を招くなど、お互いに切磋琢磨しながら学識と技量を高め米沢は本邦でも有数の蘭医学の隆盛の地となり、「東北の長崎」とも称せられるようになりました。堀内素堂もこのような俊英達の一人であり、彼の偉業は米沢蘭方医学の全体の精華とも言えるものです。

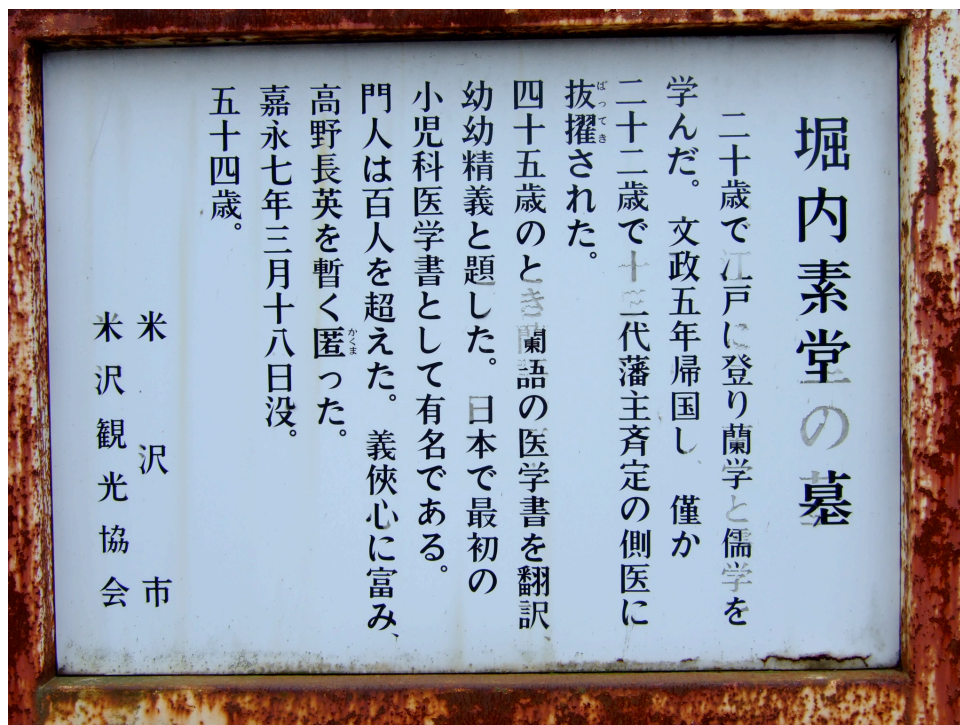


写真1 堀内素堂の事蹟を記した看板



写真2 堀内素堂のお墓のある館山寺



写真3 千葉大学附属図書館の古医書コレクションで公開されている幼幼精義